
インド雑感

ニューデリーの交通機関

大 嶽 藤 一

ニューデリーでの交通は、我々の様な旅行者にとって実に不便である。まず電車が
ないので（鉄道はあるがそれは長距離用である。）残るはバスかタクシーである。こ
のバスが曲者である。こんなバスが動くのかといったなりをしている。フェンダーは
破け（へこんでいるというのではない。そんなところは最早通り越し、まさに紙細工
の様に破けていた。）塗装は剥れ、パンパー等は地面にこそついてないが、引きずっ
ているという感じである。いや外観等はいい、それは我々の期待に反し、確かに動い
ているのであるから。朝夕のラッシュ時には乗降口に片手でぶらさがり、日本のラッ
シュの比ではない。まさにセーカスのそれであった。車掌は言うに及ばず、警官でさ
え平静という感じで注意を促す気配さえ見せなかった。しかもバスはちゃんと止まっ
てはくれない。停留場の近くになるとスピードを緩めるだけである。乗客はその間に
乗り降りしなければならない。降りられなかりと、乗れなかりと、それは乗客の
勝手であった。運転手は我関せずといった風情で走り去ってしまう。それに行先をヒ
ンディ語で書いてあるので何処へ行くのか分らない。停留場に止まらないから、聞く
訳にもいかない。えい、ままと乗ってから、やおら英語の出来そうな人に聞くの
である。バスの中はインド人独特の体臭で5分と乗っていられない。それや、これや
で神経を使い、もはや目的地に着いた時は疲れ切ってしまう。そんな訳で私も先発隊
員としてデリーについた時、わずかに乗っただけである。

すると残るはタクシーということになる。インドのタクシーは（観光用のハイヤー
は別にして。）2種類ある。一つは普通の自動車で、他の一つはスクーターと呼ばれ
る小型三輪車である。この普通自動車のタクシーは全部、尾根が黄色でボディーが黒
く塗ってあるのですぐ分かる。私はこのタクシーに乗る度にスピード・メーターが動
かないのを不思議に思った。乗るタクシーすべてが確実にスピード・メーターは振れ
なかった。ある時運転手にこの事を尋ねると、スピード・メーターのワイヤーは料金
メーターに結いでいるので、メーターは振れないのだと教えてくれた。インドではス
ピード違反等は取締っている様子もないので、それで充分用が足せるのたろう。

インド人の特にタクシーの運転手の運転は凄しい、二重追越し、センターライン無視等は朝飯前前で、反対車線の一番歩道よりを超越すのだから、乗っているこっちは生きた心持がしない。そんな訳でクラクション等はすぐ鳴らすが、これがハンドルのクラクション・ボタンで鳴らすのにお目にかかったことがない。そんなスイッチは疾く壊れているから色々な手を編み出す。別にスイッチを付けているのは良い方で（別にスイッチを付ける位なら、直した方が良いと思うのだが、）変なビニール線が出ていると思ったら、これをボディにショートさせ鳴らしていた。仕舞には屋根の上に手動クラクション（豆腐屋のラッパの後にゴムが付いていると思えば良い）をやおら窓から手を出して鳴らしていた。それでも用が足りるのだから、やはりお国柄だろう。まだこのタクシーには料金メーターが付いているから、乱暴な運転さえ我慢すれば良いが、二輪スクーターの方は、ほとんど料金メーターが付いていなかった。それらには、走行積算計が付いていて、その走行距離と換算表から料金が分かるのだがこの積算計を乗った時に零に戻すのを見ていないと、前の走行分まで取られてしまうし、大体あてにならない。2ヶ月近くのデリー滞在で、大体の料金は分かる様になった頃それよりも多額の料金を請求された、乗る時に零に戻すのを見ていたし、積算計は確かにその料金の距離を指していた。積算計の裏蓋には、何やら鉛に刻印で密封してあったから、その筋の官庁のものであろうが、そんなものはどうでもなるのだろう

全くタクシーに限らず、何を買うにも相場を知らないと、ふっかけてくることおびただしい。全く我々にとっては神経の疲れる町であった。

車窓で見たインドの町と生活

井口邦利

曲芸師もどきの運転手は国産車アンパサダーを駆って、わがもの顔につっ走り、通勤に急ぐ市民は紙袋を小脇にかかえて、目ざとく遠くにバスを見つけると、道路の真中へむらがらように飛び出し、我先にと満員バスに飛び乗り、自転車、スクーターが道端にひしめき合っているニューデリーの街も、静まり返った朝もやの中に沈んでいくころ、朝は買出しに向う牛車やリヤカー、自転車だけの世界だ。のんびりと広い通りをカタコト、カタコトと走っている。

空気が凍りそうな朝、まるで時間が止ってしまったような錯覚にとられる。昼間のむせ返るような匂いと人ごみを作っていた人達はいったいどこへ行ってしまったのだろう。と、突然にぎやかな人声と新鮮な野菜や果物を満載した自転車や牛車が目の前に飛び込んできた。青果市場だ。車はもうニューデリーの中心から離れ、数百年の昔、ムガール時代のいくつものゲートをすりぬけて市民の台所オールドデリーへ入っ

ていたのだ。

ようやく街がもとの活気を取戻すころ、車は一路西進し、緑豊かな街中を通り過ぎ街路樹にたわむれるリスたちとも別れ、郊外の勤労者の住宅街へ入っていった。

どろと石で作られた扁平な貧しい家々が所狭しとドブ川の向うにひしめいている。

このすばらしいグリーンベルトがどこまでも真すぐに伸びるアスファルトの道路に比べると、まったく対照的だ。

ヨシズのようなものを立てかけた入口には、まだ眠そうに歯をみがいている人や、ドブ川のへりにお尻をこちらに向けてあちこちで用を足している人もいる。これから、自転車やバスで勤めや学校へ出る人達であろう。

道路と並んで線路が走っている。ときどき通る列車は長く車両をつらねてゆう長に走っている。蒸気機関車の全盛である。車両の人はまだコンパートメントのベットでめざめたばかりであろう。

車とはあるガソリンスタンドに立ち寄り、これからの長距離走行にそなえる。「パトロール！」（訳注：ペトロール）とうんちゃんが叫ぶ。ボンネットを開けてまず頼みもしないのにオイルを調べるのは日本と同じだ。

国産車アンバサダーは見かけよりも意外と乗心地はよい。早起きの眠けが襲ってくる。客とはいいながら寝てしまっちは運ちゃんに申し訳がない。と思いながらもウツラウツラ……。気がつくとき古タイヤをブラ下げた店や道端には自転車式的人力車がやたらと目につく街に入っていた。インドに来た翌日、ニューデリーの繁華街へ行ったときのような、何んとも形容しがたい気分になり、思わず鼻と口を手でおおってしまった。前を走る車のほこりで前の方がよく見えない。それでも街をゆきかう人は平然と生活をしている。

先行する車は軍用トラック、すれちがう車は何んとも「ニッサンパトロール」。車と提携してノックダウンというのだろうか。国内生産しているそうである。

車が進まなくなったと思ったら後続車からクラクションでやのたてのとうるさい。どうやら道路工事で一車線走行らしい。軍用車の長蛇の列ができる。

インドでは道路工事なんて日本と同様はっきりなしである。どんな山奥でも、へき地でもアスファルトをこねている。

一昔前日本でもやっていた大きな鉄板をれんがの台の上に乗せ、下でまきをたき、上に人が乗ってアスファルトをこねまわし、大きなザルに入れ、それを天秤で運ぶ、といった具合で、人手は多く、日本ではとても採算がとれないが、人件費のやすいインドでは先業防止にはこれが一番のようだ。

道端にはアスファルトの空いたドラムカンが穴をあけられて植えたばかりの街路樹の保獲とガードレールを兼ねて並んでいる。一石二鳥である。

インドは緑をとて大切にしようである。どこでも木はこれで囲ってある。だから緑が豊かなのか。豊かだからこそ大切にするのか……。日本もこうありたい。

車は道路をアーケ - ドのようにおおっている大きな並本道の向うに田園風景が広がる中を快調に進む。この車はスピードメータもちゃんと働いているし、方向指示燈も点滅し、ストップランプもつくし、クラクションも鳴る非常に秀れた車であるから乗心地のいいのも当りまえである。気がつく道路にオイルのようなものが点々とついていく。その点がだんだん大きくなってきたな、と思ったとたんガタン・ガリガリというすごい音がした。見たらなんと前を走っているトラックのガソリンタンクがおっこちてしまったのである。それでも車はしばらく走ってようやく止った。

聞けば日本では考えられないとんでもないトラブルはここでは日常茶飯事だそうである。

車は収穫の終わった黄色く乾き切った畑がはてしなく続く田園をひた走りに走る。

ラクダの引く荷車がときどき目につくようになった。

道端の村々には庭という庭に燃料用であろうか、牛のふんらしきものを丸く30センチくらいに平べったくしたものを一面に乾かしているのが延々何十キロとわたる村々に見える。中にはそれをラクダの背にうず高く積んで運んでいるものもいる。

田園の景色を見ているのは楽しい。

大きな牛を小供が畑につれて行く風景や、水あそびをさせていたり、いろいろな井戸、牛が回したり、あるいは引いたり、ラクダが引っぱったり、どろの家の屋根にはハゲタカのような大きな鳥が何十、何百と群れてとまっていたり、うず高く革をつんだ荷を引くつの大きな白い牛、見ていてあきることを知らない。

車はようやく周りの家がどろから草ぶきに変るころ、ガルワールの山麓であろうか、シワリク丘陵地帯へ入ったあたりで引返した。

道がまた単調な一直線になる当り、あちらから、こちらから、牛、羊、山羊、馬、水牛とつれて人が集まってくる。聞けば動物の市場が立つのだそうである。

広場にはたくさん家畜が集まっていた。立派なのやよぼよぼのなどたくさん……。

太陽も西に傾き、畑仕事も終わって人々が家畜をつれて家路へ急ぐ。

草原に沈む太陽は何かもの悲しい哀愁を帯びていた。この貧しい農民が早く豊かになることを祈らずにはいられないような……。

暗い車窓から見るニューデリーの明るいイルミネーションは何ぞか空しくうつるば

かりであった。

